



ビデオメッセージを通じて会社の方向性を株主に幅広く発信する。柴田 励司氏



インディゴブルー社長 柴田 励司氏

1985年上智大文卒。カルチュア・コンビニエンス・クラブの最高執行責任者（COO）などを経て、2010年6月から現職。東証マザーズ上場のパス（旧イー・キャッシュ）、最高経営責任者（CEO）、出版のGift会長も兼務する。

私が最高経営責任者の株主が存在する上場企業（CEO）を務めている業なので、経営を託された東証マザーズ上場企業、としている立場の人間として、パスの第3四半期決算と、は説明責任を果たしたい。今後の経営の方向性を説明するつもりだ。

明らかに、最近、ビデオメッセージを撮影し、ステーションがある。第1のた。これは現在、パスのステーションは起業だ。第2のホームページに掲載して、事業を通じて、成果を出している。ビデオは撮影も編集も社内スタッフによる。このステーションの1つのゴールである。

パスは時価総額の規模からして、まだ機関投資家が投資対象とする企業ではない。それでも多く、関係者の利害を調整して、彼らの期待に答えながら、会社を更に発展させていく段階だ。

執着捨て情報発信を

テジとは大きくやり方選んたいことがあるのが変わる。常に自分の思いが最優先というわけにはいなくなるのだ。ベンチャー経営者の多くは事業家としての意識で日々の仕事をしているので、「自分の会社」を中心にして、ものごとを判断してしまふ。例えは、「長期的に会社を成長させたい」という考えをもち、ベンチャー経営者の思いだ。こう考えて会社を運営して来たとしても、利害関係者は必ずしも自分と同じ考えではない。ベンチャー経営分と同一意識ではないということを意識した方がよい。

株主の中には当然、短期的な株価上昇を期待する株主もいる。とりわけ新興市場の企業には個人株主の方々の視線が注がれている。ここには短期的なキャピタルゲイン（株式譲渡益）への期待感がある。それを自分の考えとは違ふとして、無視したり、退けたりすべきではない。

自分が成し遂げたいことへの執念と自分のやりたいことへの執着は違ふ。事業を興して、成し

選んたいことがあるのなら、自分の思いにこだわり過ぎない方がよい。しかし、このことに気づいて自分自身の行動を変えるには、それなりのきっかけが必要だ。人間は頭の中で分かっている行動も、深く意識しないと行動が伴わない。このことの失敗から痛い思いをしたからだ。ベンチャー経営者は社内では王様になりがちだ。これは態度の問題ではない。ベンチャー経営者の意思決定に異を唱える存在がないのだ。そうなる、ついつい自分の思いが最優先になってしまふ、利害が異なる関係者のことを後回しにしてしまふ。そのことが株主の伸びしろを限定してしまう。